

愛知演習林樹木誌

塚本威彦*・諸戸清一**・築瀬憲次***・蒲谷 肇**

Tree Flora of Tokyo University Forest in Aichi

Takehiko TSUKAMOTO*, Kiyokazu MOROTO**, Kenji YANASE***
and Hajime KABAYA**

I. ま え が き

これまで愛知演習林（以下「演習林」という）の樹木相についてまとめられたものはない。演習林内に生育する樹種をリストアップし、それらの生育地や特徴を記載することは、林学、生物学をはじめとする多くの分野の研究・教育の場として演習林が十分機能するために、重要なことである。

演習林（1292 ha, 図-1）は、愛知県瀬戸市の赤津事業区、穴の宮試験地、犬山市の犬山作業所と静岡県新居町の新居試験地の4団地から成り立っている。本報告は新居試験地（26 ha）を除いた地域を対象に筆者の一人である塚本威彦が1990年に取りまとめたものを、他の3名が加筆、編集したもので、内容は1990年時点のものである。

学名とその配列順は、環境庁自然保護局（1987）に従った。そこに掲載されていないもののうち帰化植物のイタチハギについては長田（1976）に、ゴキタケについては北村・村田（1979）によった。命名者については、環境庁自然保護局（1987）には示されていないので、大井（1985）、佐竹ほか（1982, 1989a, 1989b）により、また命名者の簡略化はZANDER（1984）に従って記載した。

* 元東京大学農学部附属愛知演習林

Formerly, University Forest in Aichi, Faculty of Agriculture, The University of Tokyo.

** 東京大学農学部附属演習林研究部

Research Division of The University Forests, Faculty of Agriculture, The University of Tokyo.

*** 東京大学農学部附属愛知演習林

University Forest in Aichi, Faculty of Agriculture, The University of Tokyo.

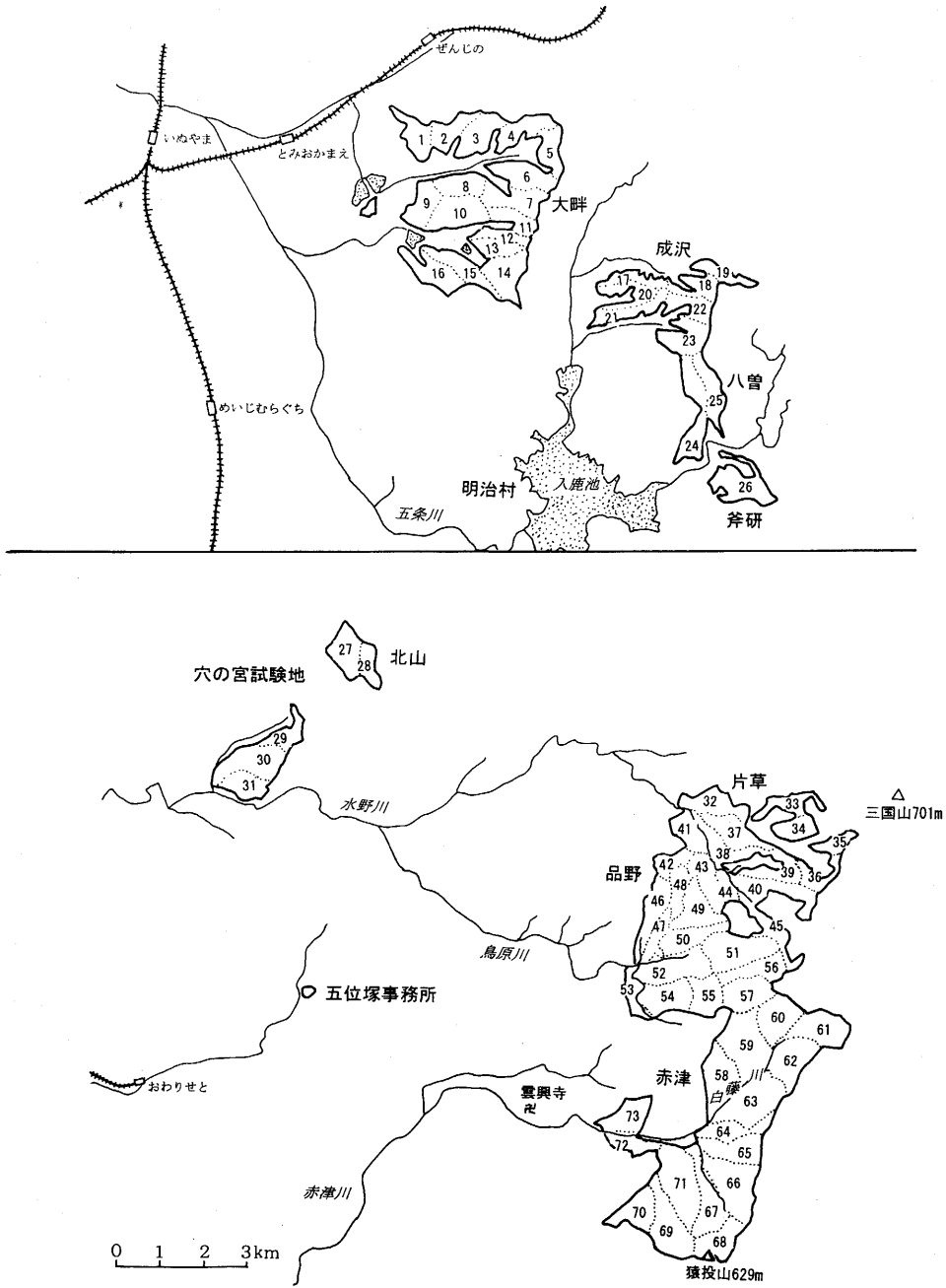


図-1 調査対象地 (上段: 犬山地区, 下段: 瀬戸地区)
 (1~73の数字は林班番号をあらわす)

なお、本報告のとりまとめにあたり、東京大学秩父演習林の梶 幹男助教授から貴重な助言を頂いた。ここに厚くお礼申し上げる。

II. 対象地域の自然環境

1. 地形・地質

愛知県瀬戸市の東南の境界にある猿投山地（最高地はおよそ 650 m）は、基盤の花崗岩が高く盛り上がり、山体を形成し、広範囲にわたって花崗岩が露出し、ガリーを作っている。西に向かって楔形の半島状を呈しながら高度を低めて尾張丘陵地となる。この地区の基盤を構成する土岐花崗岩の上に、新第三紀中新世（下部は中村層群、上部は瑞浪層群または小牧層群）が覆い、さらにその上を鮮新世の瀬戸層群が不整合に覆って、瀬戸地区一帯に広がっている。

犬山地区は愛知県犬山市の東南部の明治村の北側に位置し、海拔 100 m から 200 m の丘陵地にある。東部の八首地区は美濃帯中古生層の礫を含んだ砂岩で、他の地区は瀬戸層群の砂礫層で、地位は極めて悪い。

2. 気 候

演習林赤津作業所にある白坂観測所の観測値によると、平均気温は 13℃、年間降水量は 1,931 mm である。年平均湿度は 78% でラングの雨量係数は 149 となる。

3. 植 生

中部地方愛知県の瘠悪林地帯にあり、暖帯中南部アカマツの林の森林型であるネズミサシ—ヒサカキ型、クロマツ・アカマツ—ネジキ・ヒサカキ・ネズミサシ基群叢が分布している。

III. 樹 木 誌

GYMNOSPERMAE 裸子植物亜門

CONIFEROPSIDA マツ綱

Pinaceae マツ科

Abies firma Sieb. et Zucc. モミ

演習林内では、個体数の少ない樹種のひとつで、単木で点在する。69 林班（東白坂町 2）の谷間に樹高 20 m、胸高直径 50 cm に達するものが 1 本ある。瀬戸市内の社寺林には高木となっているものが多い。

Pinus densiflora Sieb. et Zucc. アカマツ

瀬戸市内のものは、大部分が天然生で、瘠悪地、肥沃地いずれにも生育している。かつては、大径木が林立していた赤津地域も、マツノザイセンチュウに食害され次々と姿を消した。

Pinus densi-thundergii Uyekia アイグロマツ

クロマツとアカマツの自然雑種である。当地に見られるものの外部形態は、葉に柔軟性があり、冬芽は淡褐色（クロマツは灰白色）に近く、樹皮は灰黒色のものが、稀に出現する。クロマツ造林地、砂防造林地および林地周辺の天然下種の中から見出すことができる（59林班）。

Pinus parviflora Sieb. et Zucc. ゴヨウマツ

猿投山の北面の海拔400～500 mの山腹（66～71林班、東白坂町1～2）に数多く自生する。この外、中白坂町の民有林の尾根近くにわずかに自生する。

Pinus thunbergii Parl. クロマツ

この地方に自生はなく、そのほとんどが砂防植栽などで造林されたものである。丘陵地のクロマツ林は、マツノザイセンチュウの被害にあって消滅しかけている。

Tsuga sieboldii Carr. ツガ

猿投山の北面66～77林班（東白坂町1～2）の海拔350～600 mの山腹から尾根にかけて小さな群落をつくって点在する。樹高15 m、胸高直径25 cm以上に達するものもある。

Taxodiaceae スギ科

Cryptomeria japonica (L. f.) D. Don スギ

赤津、品野地域のアカマツ、コナラ、アカシデなどからなる針広混交の天然林内でスギの大木が点在していたが、天然生か否か不明である。施業のため伐採されて、残っている個体は少ない。

Cupressaceae ヒノキ科

Chamaecyparis obtusa (Sieb. et Zucc.) Endl. ヒノキ

天然林の所々に古木、大木があり、小面積ながらヒノキ林を形成している。しかし、これら全てが天然生か否かは不明である。天然下種により、若木が育っているところもある。

Juniperus rigida Sieb. et Zucc. ネズミサシ

痩せた丘陵地では樹高2～5 mのものが普通であるが、赤津地域には、ときに樹高10 m、胸高直径15 cm以上に達するものがある。

Podocarpaceae マキ科

Podocarpus macrophyllus (Thunb.) D. Don イヌマキ

演習林内、瀬戸市内には、野生の成木は見られない。所々に生育している若木や幼木は、植栽木の種子が鳥によって運ばれたものと考えられる。

Cephalotaxaceae イヌガヤ科

Cephalotaxus harringtonia (Knight) K. Koch イヌガヤ

個体数が少なく、樹高は通常 2~3 m でこれより大きいものは見掛けられない。

TAXOPSIDA イチイ綱

Taxaceae イチイ科

Torreya nucifera (L.) Sieb. et Zucc. カヤ

演習林内、瀬戸市内には、針広混交林中に単木として自生している。ただし、猿投山北面 68 林班（東白坂町 2）の谷と山腹急斜面の針広混交林の下層には、樹高 7~8 m、胸高直径 10~15 cm の若木が数本、まとまって生育している。

ANGYOSPERMAE 被子植物亜門

DICOTYLEDONEAE 双子葉植物綱

CHORIPETALAE 離弁花亜綱

Myricaceae ヤマモモ科

Myrica rubra Sieb. et Zucc. ヤマモモ

赤津地域 58 林班（北白坂町 4）の天然林で若木 1 株（樹高 6 m、胸高直径 10 cm）が発見されているが、自生かどうか不明である。

Salicaceae ヤナギ科

Populus sieboldii Miq. ヤマナラシ、ハコヤナギ

荒地、林道、崩壊地などに出現する。個体数は少ない。カミキリムシ類の食害を受けやすく瀬戸市内では大木をみない。

Salix bakko Kimura ヤマネコヤナギ

林道脇、崩壊地など日当りのよい場所に若木が見られるが、個体数は少ない。

Salix chaenomeloides Kimura マルバヤナギ

北白坂町 5（64 林班）白藤川の川原に樹高約 8 m、胸高直径 20 cm の 1 個体がある。若木は、他の谷川沿いにも数株自生している。

Salix futura Seem. オオキツネヤナギ、オオネコヤナギ

林道、道路法面、崩壊地、川原などに点在する。個体数は少ない。

Salix gilgiana Seem. カワヤナギ

赤津川の狭い川原（67 林班）に若木の自生がある。

Salix gracilistyla Miq. ネコヤナギ

白藤川沿いに点在する。

Salix integra Thunb. イヌコリヤナギ

山野の開けた、やや湿った場所、谷川の縁、川原等に普通にみられる。

Salix serissaefolia Kimura コゴメヤナギ

66 林班戸越川の川原に小木 5 本が自生している。64 林班白藤川の川原に 1 株生育していたものは、数年前に伍位塚樹木園に移植した。瀬戸市内では川原、川岸、湿った場所に高木をみかけるが、個体数は多くない。

Betulaceae カバノキ科

Alnus hirsuta Turcz. ケヤマハンノキ

砂防緑化木として植えられたものの逸出で、植栽地周辺には天然下種によって芽生えた若木が群落を形成している。

Alnus hirsuta Turcz. var. *sibirica* (Fisch.) Schneid. ヤマハンノキ

前種と同じく、肥料木として戦後各地に植えられた。林地周辺の林道沿い、谷沿いの空き地に若木が育っている。

Alnus japonica (Thunb.) Steud. ハンノキ

演習林内では個体数は少ない。瀬戸市北部及び北東部の谷、山間湿地（海拔約 500 m まで）では点在、または数本以上からなる小群落をよく見かけ、なかには樹高 15 m 以上のものも多い。

Alnus pendula Matsum. ヒメヤシャブシ

肥料木として戦前より植えられ、禿山の緑化に重要な役割を果たしてきた。幹は叢生し主幹が立たない。砂防地周辺、谷沿いなどに天然下種により、野生化している。

Alnus sieboldiana Matsum. オオバヤシャブシ

前種と同様に、砂防緑化樹として戦前より各地に植えられている。成長が速く、幹が立ち、樹高 15 m、胸高直径 30 cm に達するものがある（61 林班）。肥料木として植えられたものが、砂防植栽主木のクロマツを被圧して、オオバヤシャブシ林が成立するケースがしばしばある。砂防地周辺の谷沿い、林道沿いに野生化したものが数多くみられ、生育もよい。

Alnus traveculosa Hand. -Mazz. サクラバハンノキ

山野の日当りのよい酸性湿地に好んで成育する。穴の宮試験地の湿地と伍位塚樹木園（1 株）に自生がある。瀬戸市内丘陵地の湿地とそこを水源とする小川、山田の縁に普通に生え、樹高は 3~10 m で、ときに 15 m に達するものがある。我が国における保護上重要な植物種及び群落に関する研究委員会種分料会（1989）によると、宅地造成によって消滅の危険性のある植物とされている。

Betula grossa Sieb. et Zucc. ミズメ

41 林班に小群落（10 数本）、68 林班（猿投山）に 1 個体がある。いずれも最近発見されたもの

である。

Carpinus japonica Bl. クマシデ

39, 61, 68 の各林班に数本ずつの自生があるが、いずれも中径木以下で大木は見られない。

Carpinus laxiflora (Sieb. et Zucc.) Bl. アカシデ

山野のいたるところで、低地から高地まで普通に生育している。山中で目につくシデはおおかたこの種である。

Carpinus tschonoskii Maxim. イヌシデ

演習林内では個体数の少ない樹種で、所々に点在するが、68, 69 林班に高さ約 18 m, 胸高直径 30 cm のものが数本自生している。

Ostrya japonica Sarg. アサダ

稀な種で、68 林班の猿投山頂近くに 1 本、69 林班の谷間に 2 本確認されている。いずれも樹高十数メートルの高木となっている。老木の樹皮は小薄片に割れて反り返るため、離れたところからでも識別が容易である。

Fagaceae ブナ科

Castanea crenata Sieb. et Zucc. クリ

かつては、当地方のいたるところに自生し、季節がくると栗拾いを楽しめた。しかし太平洋戦争後に広がったクリタマバチや胴枯病の被害を受けて、次々に枯れ、現在は山中に高木を見ることは珍しい。

Castanopsis cuspidata (Thunb. ex Murr.) Schottky ツブラジイ

演習林内では稀な種で、数本が確認されている。穴の宮試験地内 30 林班の樹高約 10 m, 胸高直径 20 cm の株が最も大きい。瀬戸市内白坂町の雲興寺の森には数多く自生し、樹高約 25 m, 胸高直径 80 cm に達するものがある。

Fagus japonica Maxim. イヌブナ

赤津、品野地域猿投山から三国山に連なる海拔 300~600 m の山腹と尾根に点在しているが、個体数は少ない。45, 57 林班には樹高約 18 m, 胸高直径 40~50 cm の大きな個体がある。低山地では、瀬戸市内の定光寺裏山（海拔約 160 m）に 1 本確認されている。

Quercus acuta Thunb. ex Murr. アカガシ

赤津地域では山麓から尾根まで普通にみられるが、品野地域では個体数は少ない。

Quercus glauca Thunb. ex Murr. アラカシ

低地、高地、痩せ地、乾燥地を問わず、いたる所に生育し、当地方でカシと言えはこの種を指す。

Quercus mongolica Fisch. ex Ledeb. モンゴリナラ

穴の宮試験地の全域、犬山地区の 10, 11, 13, 14, 15 林班に自生する。赤津、品野地域には生育しない。モンゴリナラは中部地方では愛知県の尾張東北部と三河北西部、岐阜県の東濃地方に広く分布している種であるが、北海道から東シベリヤに生育する種と同一とみるかどうか今後の研究が待たれる。

Quercus mongolica Fisch. ex Ledeb. subsp. *crispula* (Bl.) Menitsky ミズナラ

猿投山山頂に 1 本、品野地域の 42, 43 ほか数林班に単木状に生育する。分布範囲は海拔 400~600 m で、樹高 10 m 内外、胸高直径 15~20 cm と小さい。これらのうちの数個体はコナラとの雑種であるミズコナラと類似する形態を呈している。

Quercus myrsinaefolia Bl. シラカシ

演習林内では、なぜか個体数が少なく目につくのは若木ばかりで、親木となる大径木はほとんど見あたらない。

Quercus salicina Bl. ウラジロガシ

海拔 300~600 m の山地にはやや普通に生育するが、丘陵地には少ない。62 林班のカシ類保存林では本種が優占している。

Quercus serrata Thunb. コナラ

演習林内のいたる所に生育し、天然林の優占種として常に高木層を占め、ときに樹高 20 m、胸高直径 40 cm 以上になることも珍しくない。

Quercus sessilifolia Bl. ツクバネガシ

演習林内にやや普通に生育する。アカガシと同様に赤津地域に比べて、品野地域の個体数は少ない。

Quercus variabilis Bl. アベマキ

瀬戸市内の丘陵地ではコナラに次いで最も普通に生育し、所々でアベマキ林を形成している。しかし演習林内の赤津、品野地域（海拔 300~600 m）では、個体数が少ない。東白坂町、北白坂町ではほとんど見られないが、猿投山山頂（68 林班）には大径木が 1 本ある。

Ulmaceae ニレ科

Celtis sinensis Pers. var. *japonica* (Planch.) Nakai エノキ

演習林内では稀な種で 62 林班の天然林に 1 株の大径木があったが、造林のため伐採された。なお同林班ヒノキ造林地内の 1 本（樹高 15 m 胸高直径 30 cm）は保存されている。若木の自生は所々に見られる。

Moraceae クワ科

Broussonetia kazinoki Sieb. ヒメコウゾ

山野の谷間，林道脇，林縁など，やや開けたところに生育する。雌雄同株。枝は細く長く蔓状に伸びるが，他物に巻きつかない。

Ficus nipponica Franch. et Savat. イタビカズラ

山中の岩石，樹幹に這いのぼり，ときに地上を這う。演習林内，瀬戸市内ともに個体数は少ない。

Morus australis Poir. ヤマグワ，シマグワ

赤津，品野地域では稀な種で，60 林班の林道脇に若木 1 本が確認された。犬山地区には低木が存在する。

Urticaceae イラクサ科

Boehmeria spicata (Thunb.) Thunb. コアカソ

61, 62, 70 林班の谷間に生育するが，個体数は少ない。

Santalaceae ビャクダン科

Buckleya lanceolata (Sieb. et Zucc.) Miq. ツクバネ

半寄生植物で，主な宿主はヒノキである。東白坂町と北白坂町のヒノキ林に自生し，個体数も多い。品野地域には少ない。

Loranthaceae ヤドリギ科

Korthalsella opuntia (Thunb.) Merr. ヒノキバヤドリギ

演習林内では，主に尾根筋のソヨゴの枝のほか，イヌツゲ，ヒサカキなどに半寄生する。

Taxillus kaempferi (DC.) Danser マツグミ

演習林内のアカマツ，ゴヨウマツ，ツガなどの梢あるいは高枝上に半寄生する。

Magnoliaceae モクレン科

Magnolia obovata Thunb. ホオノキ

演習林内いたるところに，通常単木で生育する。

Magnolia salicifolia (Sieb. et Zucc.) Maxim. タムシバ

演習林内では，赤津・品野地域の山麓から尾根（海拔 300～600 m）にかけて普通に生育する。谷間には樹高 15 m 以上，胸高直径 30 cm に達するものもある。早春，葉に先駆けて白花が開き，遠方からもその所在が確認できる。

Magnolia tomentosa Thunb. シデコブシ

穴の宮試験地，犬山地区の丘陵地（海拔 100～200 m）の小湿地と湿潤な谷間に自生する。穴の

宮試験地北山団地には、樹高 1.5~4 m の個体が多数自生する。

我が国における保護上重要な植物種及び群落に関する研究委員会種分科会 (1989) によると、本種の分布は三重県北部、愛知県、岐阜県中・東部に限られて分布しており、開発によって絶滅の危険性の高い植物とされている。

Schisandraceae マツブサ科

Kadsura japonica (Thunb.) Dun. サネカズラ, ビナンカズラ

山腹、谷間、林床などのやや肥沃なところに普通に見られ、乾いた丘陵地、尾根にはほとんど見られない。

Schisandra repanda (Sieb. et Zucc.) Radlk. マツブサ

林縁、谷間、山腹などのやや開けたところに生育するが、個体数は概して少ない。

Illiciaceae シキミ科

Illicium anisatum L. シキミ

個体数が多い樹種の一つで、仏花 (ハナノキ, オハナ) として盛んに利用され、昨今その需要を満たすため農家で栽培される。

Lauraceae クスノキ科

Actionodaphne lancifolia (Sieb. et Zucc.) Meissn. カゴノキ

62 林班の天然林中に小径木が散見される。68, 69 林班にもそれぞれ 1 本確認された。瀬戸市内定光寺の裏山では大径木となっているが、個体数は少ない。

Cinnamomum camphora (L.) Presl クスノキ

演習林内には成木はなく、鳥類による散布種子が発芽したと思われる幼木が所々に分布する。

Cinnamomum japonicum Sieb. ex Nakai ヤブニッケイ

普通に自生するが、ほとんどが小径木で、大径木は少ない。

Lindera erythrocarpa Mak. カナクギノキ

赤津、品野地域の山腹、谷間に普通に自生し、樹高 10 m, 胸高直径 25 cm 以上に達するものも少なくない。

Lindera glauca (Sieb. et Zucc.) Bl. ヤマコウバシ

低地から山地までやや普通に見られる。単木で生育し、個体数は少ない。

Lindera obtusiloba Bl. ダンコウバイ

シロモジに比べて、個体数ははるかに少なく、林内でときに散見する程度である。

Lindera sericea (Sieb. Zucc.) Bl. var. *glabrata* Bl. ウスゲクロモジ

瀬戸地方には、今まで未知の種であったが、1990年6月の林況調査の折に、35林班の沢沿いで数株の自生が確認された。クロモジに比べて葉身がひとまわり大きく、葉が薄い。また、ケクロモジとの違いは葉の表側に短絨毛の無いことで区別される。

Lindera umbellata Thunb. クロモジ

やや普通に自生するが、群落は形成していない。

Neolitsea aciculata (Bl.) Koidz. イヌガシ, マツラニッケイ

59, 62林班に自生しているものは、いずれも若木で個体数は少ない。瀬戸市内定光寺には高木がある。

Neolitsea sericea (Bl.) Koidz. シロダモ

赤津地域にはやや普通に生育するが、品野地域に入ると個体数の減る傾向がある。幼木と中径木がほとんどで、古木、大径木は見られない。36林班の尾根近くの鞍部(海拔約610m)に樹高約8m、胸高直径30cmの1株がある。

Parabenzoin trilobum (Sieb. et Zucc.) Nakai シロモジ

赤津、品野地域には極めて普通に自生し、しばしば純林(36, 40林班)を形成する。

Eupteleaceae フサザクラ科

Euptelea polyandra Sieb. et Zucc. フサザクラ

当地方には、元来の自生は無かったが、近年、61, 67林班、瀬戸市内上半田川町にそれぞれ1本ずつの生育が確認された。いずれも、砂防堰堤の脇に生育する若木であることから、堰堤工事に付随して他地域から持ち込まれたものと推測される。

Berberidaceae メギ科

Berberis sieboldii Miq. ヘビノボラズ

湿地に極めて普通に生育し、ときに小群落をつくる。

Berberis thunbergii DC. メギ

瀬戸市内には、個体数の少ない種の一つで、36林班の2ヵ所で1株ずつ確認されている。以前、40林班の海拔600m付近の谷間に自生していた株の一部は伍位塚樹木園に移植された。

Nandina domestica Thunb. ナンテン

演習林内には、元来の自生は無く、鳥などの伝搬により、庭などで栽培されていたものが逸出したと思われる実生の幼木が点在している。

Lardizabalaceae アケビ科

Akebia quinata (Thunb.) Decne. アケビ

山野に普通に生育する。

Akebia trifoliata (Thunb.) Koidz. ミツバアケビ

山野に普通に生育する。

Stauntonia hexaphylla (Thunb.) Decne. ムベ

当地方に生育する個体数は概して少ない。幹の径はときに3~5 cm になり、果実はアケビと違って裂開せず、鳥が皮を食い破って果肉を食べる。

Actinidiaceae マタタビ科

Actinidia arguta (Sieb. et Zucc.) Planch. ex Miq. サルナシ, シラクチヅル

幹の径が6 cm を超え、つるは高さ十数 m の他木にからみ、樹冠を被圧しているのが、ときどき見かけられる。

Actionidia polygama (Sieb. et Zucc.) Planch. ex Maxim. マタタビ

山地の谷間、林縁の湿ったところに好んで生育する。白藤川沿いに多く自生する。

Theaceae ツバキ科

Camellia japonica L. ヤブツバキ

赤津地域では、個体数の多い樹種の一つであるが、大径木はない。

Cleyera japonica Thunb. サカキ

山野に普通に生えるが、演習林内には大木はない。瀬戸市内の社寺林に樹高12 m、胸高直径30 cm を超えるものがある。

Eurya japonica Thunb. ヒサカキ

当地方ではごく普通にみられる樹種。果実は小鳥が好んで食べるため、種子は新砂防地のような全く常緑樹の無い場所に運ばれ、いち早く定着する。

Stewartia pseudo-camellia Maxim. ナツツバキ

かつて瀬戸市内の中央丘陵地(旧演習林地)に数多く自生していたが、都市開発によって急速に減少している樹種のひとつである。穴の宮試験地31林班に数本自生している。

Hamamelidaceae マンサク科

Corylopsis glabrescens Franch. et Savat. var. *gotoana* (Mak.) Yamanaka コウヤミズキ, ミヤマトサミズキ

演習林内は42林班と45林班を結んだ線から北側(三国山麓西側)にやや普通に生育する。瀬戸市内では、上半田川町まで分布する。

Disanthus cercidifolius Maxim. マルバナノキ, ベニマンサク

赤津地域にはほとんど自生していないが、品野地域では 32 林班から 52 林班までの広域に自生している。瀬戸市内では、東部の三国山南西部の山地に分布する。

Hamamelis japonica Sieb. et Zucc. マンサク

山野のいたるところに普通に生育する。幹は通常 2~数本に株立し、樹高 7~8 cm, 胸高直径 10 cm 内外であるが、まれに単木で生育する場合は高さ 10 cm, 胸高直径 15 cm を超える。陽地では開花が早く 1 月中下旬に咲き始める。

Saxifragaceae ユキノシタ科

Deutzia crenata Sieb. et Zucc. ウツギ

林道脇、林縁、谷川沿いなどの、開けた場所に普通に自生する。

Hydrangea hirta (Thunb.) Sieb. コアジサイ

瀬戸市内の東、北部の山地のいたるところに自生し、個体数の多い樹木の一つである。演習林内では、ときに大群落を形成することがある。

Hydrangea involucrata Sieb. タマアジサイ

61, 62 林班の白藤川沿いの所々に群生する。他の林班では、極めて稀である。

Hydrangea macrophylla (Thunb.) Ser. var. *acumonata* (Sieb. et Zucc.) Mak. ヤマアジサイ, サワアジサイ

山地の谷間、林下のやや湿ったところに普通に生育する。当地方に自生するヤマアジサイの花は全て白色である。

なお、茎葉はヤマアジサイと変わらないが、花序のほとんどが装飾花となり、白色でしばしば淡紅色を帯びるマイコアジサイが、1988 年に白藤川のふちで 1 株発見された。

Hydrangea paniculata Sieb. ノリウツギ

山野の日たりのよい所に普通に生育する。また湿地にもよく自生している。樹高はときに 5~6 m に達する。

Schizophragma hydrangeoides Sieb. et Zucc. イワガラミ

花季は 6 月で、高木の樹冠にからみついて咲いている白い花が、遠くから見られる。

Rosaceae バラ科

Amelanchier asiatica (Sieb. et Zucc.) Endl. ex Walp. ザイフリボク

山中を歩いて時折見掛ける程度で、個体数は少ない。樹高は 4~5 m, 胸高直径 3~6 cm で大きいものはない。

Malus toringo (Sieb.) Sieb. ex Vriese ズミ

日当りの良い湿った所に普通に生育するが、時に乾いた所、尾根、日陰の谷間などに生育する。

葉形に変化が多い。花弁は淡紅色から白色で美しい。

Malus tchonoskii (Maxim.) Schneid. オオウラジロノキ

低地 (100 m) から高地 (600 m) まで土地を選ばず生育するが、個体数は少ない。41 林班の山腹に樹高およそ 16 m, 胸高 25 cm に達するものが 1 株自生する。刺状になった太い短枝をつけることが多い。

Photinia glabra (Thunb.) Maxim. カナメモチ

犬山地区ではやや普通に自生し、穴の宮試験地では点在するが、赤津、品野地域ではほとんど見かけない。瀬戸市内では水野地区、定光寺付近には自生が多い。

Pourthiaea villosa (Thunb.) Decne. var. *leavis* (Thunb.) Stapf カマツカ, ウシコロシ

赤津、品野両地域の山麓から尾根までやや普通に生育する。樹高 4~6 m, 胸高直径 4~5 cm で大きなものはないが、枝の伸長はよい。瀬戸市内の中央丘陵地や穴の宮試験地には、ほとんど見られない。

Pourthiaea villosa (Thunb.) Decne. var. *zollingeri* (Decne.) Nakai ケカマツカ

穴の宮試験地や瀬戸市内中央丘陵地に普通に生育する。幹は元から 2~数本株立し、高さ 2~3 m, 胸高直径 2~4 cm に成長する。通常幹には短枝が多く、長枝が少ない。東部や北部山地にはほとんど生育をみない。

Prunus grayana Maxim. ウワミズザクラ

演習林内ではヤマザクラと同一環境に生育するが、成長はヤマザクラよりやや劣る。緑色の未熟果を塩漬したものは安仁子と呼ばれ、食品として販売されている。

Prunus jamasakura Sieb. ex Koidz. ヤマザクラ

演習林内では、各地に大径木が点在し、天然林の優占種となっている。近年、品野地域の大木が原因不明で次々と枯れているのが憂慮される。

Prunus jamasakura forma *pubescens* (Mak.) Ohwi ウスゲヤマザクラ

白坂苗畑の縁に若木がある。ヤマザクラとは葉柄と花柄に微毛があることで区別される。

Prunus lannesiana (Carr.) Wils. var. *speciosa* (Koidz) Mak. オオシマザクラ

瀬戸市内には、稀に点在するが、自生か否か不明である。演習林内は赤津作業所前の県道脇に 1 株あるが、県道側壁工事後に生育し、人為による逸出と思われる。

Prunus pendula Maxim. forma *ascendens* (Mak.) Ohwi エドヒガン

62 林班の海拔 530 m の天然林で 1988 年に 1 株確認された。この株は胸高直径約 1 m, 中心は空洞となり 2 m 程の高さから 3 本の幹に分かれ、樹高約 15 m である。花は白色である。市内定光寺には大径木が多く、花は淡紅色のものから白色のものまでである。

Prunus spinulosa Sieb. et Zucc. リンボク

演習林内の北白坂町 2, 4, 5 に点在するが、そのほとんどは小径木である。瀬戸市内の北、東部

の山中にやや普通に見られるが、個体数はそれほど多くない。地表近くの残い根から萌芽する性質があるため、親木の伐採後もその週辺に幼木が育っている。

Prunus verecunda Koehne カスミザクラ, ケヤマザクラ

山野に普通に生育する。ヤマザクラと混生しているが、ヤマザクラとは若葉が淡緑色～緑色で、葉柄、花柄に毛があることで区別される。開花はヤマザクラより1週間程度遅い。

Pyrus pyrifolia (Burm. f.) Nakai ヤマナシ

67 林班の林道脇に2本の若木が見つかった。林道工事後に人為的原因で生育したものと思われる。これらは、伍位塚樹木園に移植した。

Rosa multiflora Thunb. ノイバラ

山野の開けた所, 湿地, 道端などに普通に生育する。開花時には強い芳香が周りに漂う。バラの接木台として用いられる。

Rosa paniculigera Mak. ミヤコイバラ

演習林内の山地に生育するイバラのほとんどは本種である。ときに、他物によりかかって、高く登る。

Rosa sambucina Koidz. ヤマイバラ

東白坂町 1, 2 (66~70 林班) の林道脇, 谷間に自生する。茎は他物によりかかって高く登るため、その傍らを通っても気づかないことがある。

Rosa wichuraiana Crep. テリハノイバラ

日当りのよい荒地, 道端, 川岸, 土手などに生育し、茎は地上を這う。瀬戸市内では各所に見られるが、演習林内では31 林班の道路脇に僅かに自生するのが確認された。近年、バラの接木台として広く利用されている。

Rubus buergeri Miq. フユイチゴ

犬山地区 24, 25, 26 林班では林床一面に大群落をつくっている。瀬戸地区の演習林内では、稀な植物で、只一ヶ所 71 林班のヒノキ林下に群落があるのみである。瀬戸市内の山地に普通に生え、ときに大群落を形成する。

Rubus corchorifolius L. f. ビロウドイチゴ

穴の宮試験地 29 林班には僅かに自生するが、赤津, 品野地域には全く生えていない。瀬戸市北部の山中には普通に生育する。犬山地区 24, 25, 26 林班に点在する。

Rubus crataegifolius Bunge クマイチゴ

皆伐地, 若い造林地, 林道脇, 日当りのよい谷間などに生育する。高さは、ときには3 m に達し造林木の障害木の一つである。当地方では暖冬でない限り地上部は冬に枯れる。

Rubus hirsutus Thunb. クサイチゴ

67 林班赤津川上流で谷川の法面に小群落があったが、スギの植林によって、環境がかわり、絶

滅の心配がある。瀬戸市内では、所々に点在する。

Rubus microphyllus L. f. ニガイチゴ

山野に普通に生育する。荒地、伐採跡地、新設林道、新しい崩壊地などの日当りのよい場所で最も早く繁茂する植物である。

Rubus palamatus Thunb. var. *coptophyllus* A. Gray モミジイチゴ

新造林地では、ニガイチゴ、クマイチゴとともに刺の枝をからませて繁茂するため、育林作業の厄介ものである。花は下向きに咲き果実は下垂する。

Rubus parvifolius L. ナワシロイチゴ

林縁、林道脇の日当たりの良いところに生育するが、個体数は少ない。

Rubus phoenicolasius Maxim. エビガライチゴ、ウラジロイチゴ

若い造林地、林道脇の開けたところに出現するが、個体数は少ない。

Rubus sumatranus Miq. コジキイチゴ

穴の宮試験地 29 林班の砂防林に僅かに自生する。瀬戸市内では各所に点在する。

Sorbus alnifolia (Sieb. et Zucc.) C. Koch アズキナシ

低地から高所までいたる所に生育するが、個体数はそれほど多くない。開花時は樹冠一面に花をつけ、遠くからでもそれと確認できる。

Sorbus gracilis (Sieb. et Zucc.) C. Koch ナンキンナナカマド

品野地域 41~57 林班の海拔 400~600 m の山腹、尾根の花崗岩地に点在して生育する。個体数は少なく、瀬戸市内はこの地域以外に確認されていない。

Sorbus japonica (Decne.) Hedl. ウラジロノキ

個体数はアズキナシより更に少ない。

Stephanandra incisa (Thunb.) Zab. コゴメウツギ

犬山地区八曾の谷間に生育するが、個体数は少ない。瀬戸地区の演習林内では発見されていない。

Leguminosae マメ科

Albizia julibrissin Durazz. ネムノキ

典型的な陽樹で、河岸、原野、林縁や谷間に太い枝を横に広く伸ばした大径木をよく見かける。

Amorpha fruticosa L. イタチハギ、クロバナエンジュ

穴の宮試験地 31 林班に数株生育している。樹高 1.5~3 m。花は 6 月に咲き黒紫色。北米原産で、戦後、当地方にも砂防緑化樹として導入され、瀬戸市内の荒地、川原などに逸出したものが点在する。

Caesalpinia decapetala (Roth.) Alston var. *japonica* (Sieb. et Zucc.) Ohashi ジャケツイバラ

山野の谷間，山腹に生育する。茎葉に堅い逆刺があって，人をよせつけず，蔓は逆刺を他物にひっかけて登り，時に長さ 10 m，直径 4 cm を超える。老いた蔓につく刺の基部は，突出して円錐状に膨らむ。長い総状花序は鮮黄色の花をつけるため，開花時には遠くから確認できる。

Lespedeza bicolor Turcz. ヤマハギ

通常マルバハギと混生し，形態もよく似ているため，花序がつくまで区別が難しい。

Lespedeza buergeri Miq. キハギ

66~71 林班の日当りのよい谷間，林道に生育するが，個体数は少ない。通常，樹高は 1.5~2.5 m である。

Lespedeza cyrtobotrya Miq. マルバハギ，ミヤマハギ

日当りのよい林縁，林道に生育する。高さ 1.5~2.5 m で，林内の古株には高さ 3 m，胸高直径 3 cm に達するものがある。花序は基部の葉と同長あるいは短く集まってつく。

Lespedeza thunbergii Nakai var. *albiflora* forma *angustifolia* (Nakai) Ohwi ニシキハギ，ビッチュウヤマハギ

67 林班の量水堰堤の土手に 1 株自生があったが，伍位塚樹木園に移植した。高さは 2 m。形態はヤマハギに似るが，葉は長楕円形，狭長楕円形で，小葉の表面に圧細毛を密生し，萼裂片の先は鋭尖頭あるいは鋭頭となる。瀬戸市内では最近完成した砂防堰堤の周辺や道路の法面などに時折出現する。

Maackia amurensis Rupr. et Maxim. var. *buergeri* (Maxim.) Schnei. イヌエンジュ

演習林内に点在し，個体数は多くない。大きいものでは樹高 15 m 内外，胸高直径約 25 cm の個体がある。ほぼ隔年に開花し，成木の近くには若木がよく発芽し，成長している。

Robinia pseudo-acacia L. ハリエンジュ，ニセアカシヤ

戦前より，砂防地，瘠悪地等に植えられた。それらから自然下種や根からの萌芽によって野生化している。

Wisteria floribunda (Willd.) DC. フジ

山野に最も普通に生育する。蔓は左巻きで，他木に巻き付いて成長し，しばしば主木を圧倒するほどの大藤木となる。造林木にとって最大の厄介ものである。

Euphorbiaceae トウダイグサ科

Mallotus japonicus (Thunb.) Muell. Arg アカメガシワ

山野に普通に自生する。空地，伐採跡地，新造林地で最も早く発芽成長し，植栽木と競合する陽樹である。

Sapium japonicum (Sieb. et Zucc.) Pax et K. Hoffm. シラキ

山野に普通に自生する。演習林内及び瀬戸市内では小径木が多く，大きいものでも樹高約 8 m，

胸高直径 10 cm 内外である。

Daphniphyllaceae ユズリハ科

Daphniphyllum macropodum Miq. ex Kurz. ユズリハ

実生の若木が天然林に時折見られるが、成木は稀である。68 林班猿投山の山腹（海拔 560 m）の急斜面に、樹高約 10 m、胸高直径約 20 cm の 1 株が自生しているが、傾斜木で樹形は良くない。

Rutaceae ミカン科

Orixa japonica Thunb. コクサギ

61, 62 林班のやや湿った林内でよく繁茂し、ときに大きな群落をつくる。

Skimmia japonica Thunb. ミヤマシキミ

低地から高所の山地の林下にやや普通に自生する。

Zanthoxylum ailanthoides Sieb. et Zucc. カラスザンショウ

新造林地に、時折若木の生育を見たが、下刈りによって見られなくなった。天然林においても成木は見られない。

Zanthoxylum armatum DC. var. *subtrifoliatum* (Franch.) Kitamura フユザンショウ

62 林班に数個体が自生するが、試験地の手入れで下刈りされて成長が妨げられている。

Zanthoxylum piperitum (L.) DC. サンショウ

個体数は多くないが、所々に自生する。

Zanthoxylum schinifolium Sieb. et Zucc. イヌザンショウ

山野に生育するが、個体数は多くない。樹高は 3~4 m、ときに 6~7 m になる。

Meliaceae センダン科

Melia azedarach L. var. *subtripinnata* Miq. センダン

犬山地区に幼木が点在するのみで、成木はみられない。

Anacardiaceae ウルシ科

Rhus javanica L. var. *roxburgii* (DC.) Rehd. et Wils. ヌルデ

日当りの良い山野に自生する。太い枝を斜上させて伸び、高さ 7~8 m に達し、ときに 10 m を超えるものがある。有毒植物で人によっては、皮膚に炎症（カブレ）を起こすので、注意を要する。

Melia sylvestris Sieb. et Zucc. ヤマハゼ, ハゼ

演習林内では、樹高が2~4 mの若木が普通に見られるが、成木は少ない。瀬戸市内の天然林には10 mを超えるものがある。

Melia trichocarpa Miq. ヤマウルシ

山野に普通に生育する。樹高は通常2~4 mであるが、山中の谷間にあるものは、胸高直径10 cm、樹高8 mを超える。ヌルデと同様に人によっては、漆カブレを起こす。

Aceraceae カエデ科

Acer crataegifolium Sieb. et Zucc. ウリカエデ, メウリノキ

山野のいたるところに普通に生育する。深い山中では、樹高10 mに達するものをよく見る。

Acer capillipes Maxim. ホソエカエデ

39林班の尾根近くの山腹(海拔約600 m)に1株自生するのが、1988年5月に確認された。今のところ同株が当地方唯一のもので、樹高約8 m、胸高直径12 cmで、葉に白斑がある。近くにウリハダカエデの自生がある。

Acer carpinifolium Sieb. et Zucc. チドリノキ

61林班の海拔560 m付近の谷間に数株の自生が1987年に確認された。いずれも小径木である。瀬戸市内定光寺裏山に自生するが、個体数は少ない。

Acer ginnala Maxim. var. *aidzuense* (French.) Ogata カラコギカエデ

62林班の谷間の試験地(スギ造林法の2)内に1株の自生があった。伐採される恐れがあるため、伍位塚樹木園に移植された(昭和45年)。その後演習林内では自生のもは確認されていない。瀬戸市内では下半田川町に数株の自生がある。

Acer mono Maxim. forma. *marmoratum* (Nichols.) Hara エンコウカエデ, イタヤカエデ

赤津、品野地域に点在し、ときに大径木となる。瀬戸市内北東部には、大径木も多い。

Acer mono Maxim. forma. *connivens* (Nichols.) Rehd. ウラゲエンコウカエデ

演習林内では前種と同じ地域に自生するが、個体数は少ない。ときに、樹高は10 mを超え、胸高直径は30 cmに達するものがある。

Acer palmatum Thunb. イロハモミジ, タカオカエデ

60, 61, 62林班に自生があるが、個体数は少く、ほとんどが若木である。瀬戸市内北部には大木が見られる。

Acer pycnanthum K. Koch ハナノキ

1990年4月の林況調査の際、開花中の雄株1株が確認された。本株は、49林班の海拔450 m付近のやや湿った小さな谷間に自生し、樹高18 m、胸高直径43 cmの大木である。岐阜、長野、愛知3県の特産種であり、各県の自生地の多くは、天然記念物の指定を受けている。本種は、愛知県では、三河東北部が主な自生地で、尾張では今回初の発見であることから、本株は分布上貴

重な存在といえる。

Acer rufinerve Sieb. et Zucc. ウリハダカエデ

39, 40 林班の天然林の海拔 600 m 付近に樹高 10 m 内外の個体が点在する。三国山近くの民有林にも自生するが、個体数は少ない。

Acer sieboldianum Miq. イタヤメイゲツ, コハウチワカエデ

赤津, 品野地域にはごく普通に自生し, 山中で目につくカエデのほとんどは本種である。瀬戸市内山地にも普通に生育する。

Sabiaceae アワブキ科

Meliosma myriantha Sieb. et Zucc. アワブキ

赤津, 品野地域にはやや普通に自生するが, 個体数は少なく, 大方は中径木で, 大径木は少ない。瀬戸市内北東部の山地には大径木がある。

Meliosma tenuis Maxim. ミヤマハハソ

1988 年に 62 林班 (海拔約 400 m), 1990 年に 61 林班 (同 550 m) でそれぞれ 1 個体が確認された。ともに小径木である。これら以外に瀬戸市内では見つからない。

Aquifoliaceae モチノキ科

Ilex crenata Thunb. イヌツゲ

山野に普通に生育する。丘陵地のものの樹高はせいぜい 3 m 止まりであるが, 山地の谷間に生育するものは 8 m に達する。大木では葉に変異が多い。

Ilex crenata Thunb. forma *microphylla* Rehd. コバノイヌツゲ

丘陵地の湿地やその周辺, 池の周りなどに生育する。枝は小枝を密につけて全体が萎縮した形をしている。庭木に植えられる。

Ilex integra Thunb. モチノキ

犬山地区に自生するが, 個体数は少ない。演習林瀬戸地区では全く見かけないが, 瀬戸市北部山地には中径木が点在する。

Ilex latifolia Thunb. タラヨウ

62 林班の谷間, カシ保存林に 1 株自生が見られるのみである。樹高約 8 m, 胸高直径 10 cm で, 地上部が一旦枯れて基部から萌芽したものである。瀬戸市内でも稀である。

Ilex macropoda Miq. アオハダ

山野のいたるところに普通に生育する。山地の谷間では, 樹高 10 m, 胸高直径 30 cm を超えるものが多い。果実は球形で赤熟し, ときに切り花として利用される。

Ilex micrococca Maxim. タマミズキ

1990年に、46林班の北原川の源流で3株発見された。樹高は10~14 m、胸高直径は22~28 cmである。これまで赤津地域で若木(高さ2 m)が3本確認されたのみで、成木は今回がはじめてである。犬山地区斧研に樹高16 m、胸高直径30 cmの個体がある。瀬戸市内定光寺には高木があるが、個体数は少ない。

Ilex nipponica Mak. ミヤマウメモドキ

48林班の鳥原川源流の谷間の湿地で、2株が約200 m離れて自生するのを1990年6月に発見した。いずれも雄株で、樹高はおよそ1.5 m、幹は根元から数本叢生している。

Ilex pedunculosa Miq. ソヨゴ

瘦せ地、乾燥地から谷間、低地から高地(尾根)まで、いたるところに自生する個体数の多い樹種である。山地の谷間では樹高10 m、胸高直径25 cmに達するものもある。

Ilex serrata Thunb. ウメモドキ、オオバウメモドキ

日当たりのよい山間の湿地、池の周辺に普通に生育する。また山野のいたるところにみられるが、個体数は少ない。果実は赤熟して美しく、生け花に利用される。庭木、盆栽としても植えられる。

Ilex sugerokii Maxim. var. *longipedunculana* (Maxim.) Mak. ウシカバ、クロソヨゴ

猿投山北面68, 69林班の山腹、尾根などの海拔400~500 m付近に点在する。また63林班白藤川の近くに1群落がある。樹高は2~3 mで、瀬戸市内では個体数の少ない植物の一つである。

Celastraceae ニシキギ科

Celastrus orbiculatus Thunb. ツルウメモドキ

山地に点在するが、個体数は少ない。秋に、球形の果実は鮮黄色となり、果皮が3裂し橙赤色の種子が現れ、黄と赤の対比が美しく、生け花の材料として盛んに利用される。また盆栽にも賞用される。

Euonymus alatus (Thunb.) Sieb. ニシキギ

山野に自生するが、当地方では個体数は少ない。庭園に植えられ、生け花として利用される。

Euonymus alatus (Thunb.) Sieb. forma *ciliato-dentatus* (Franch. et Sav.) Hiyama コマユミ

山野に自生するが、個体数は少ない。ニシキギに似て枝にコルク質の翼が付かないことで区別される。

Euonymus fortunei (Turcz.) Hand. -Mazz. var. *radicans* (Sieb. ex Miq.) Rehd. ツルマサキ

山地に点在するが、個体数は少ない。68林班の猿投山直下の海拔570 m付近に、岩上、樹上を登っている数株がみられる。

Euonymus oxyphyllus Miq. ツリバナ

山地にやや普通に生育する。幹は通常斜上し、樹高は3~5 m、胸高直径は3~4 cmである。

Euonymus sieboldianus Bl. マユミ

犬山地区には若木が点在するが、瀬戸地区ではほとんど見かけない。瀬戸市内でも稀な種である。

Staphyleaceae ミツバウツギ科

Euscaphis japonica (Thunb.) Kan. ゴンズイ

山地に点在するが、個体数は少ない。稀に樹高 8 m, 胸高直径 15 cm に達するものもあるが、目につくのは若木である。

Rhamnaceae クロウメモドキ科

Berchemia racemosa Sieb. et Zucc. クマヤナギ

山地に点在するが、個体数は多くない。蔓は樹木によじ登って樹冠を覆う。古い幹の直径は数 cm に達する。

Berchemia racemosa Sieb. et Zucc. var. *magna* Mak. オオクマヤナギ

68 林班の猿投山山腹に数株が自生する。この株の特徴は葉身の長さが 5~13 cm, 幅が 2~8 cm, 側脈が 8~12 対で、葉の表は無毛、葉の裏は緑白色で全面に無色の短毛が生え、葉柄にも短毛が密生する。花序梗、花柄は無毛である。

Frangula crenata (Sieb. et Zucc.) Miq. イソノキ

丘陵地の湿地や小池の周辺などによく見られる。山野の谷間に生育するものは、樹高がときに 7~8 m に達する。

Rhamnus japonica Maxim. var. *microphylla* Hara コバノクロウメモドキ

1990 年春に、37, 38 林班でそれぞれ 1 株発見された。造林地の小さな谷間に生え、樹高は 1 m 内外である。葉の長さが 2~4 cm でクロウメモドキの 2~7 cm と区別される。

Hovenia trichocarpa Chun et Tsiang. ケケンボナン

谷間、山腹に普通に生え、樹高は約 15 m, 胸高直径は 20 cm を超えるものも多く、高木層を形成している。果実の表面は褐色毛が密生する。

Vitaceae ブドウ科

Vitis ficifolia Bunge var. *lobata* (Regel) Nakai エビヅル

各所に点在するが、個体数は多くない。果実は甘酸味があって食べられる。

Vitis flexuosa Thunb. サンカクヅル, ギョウジャノミズ

各所に点在するが、個体数は多くない。果実は酸味が多いが食べられる。

Parthenocissus tricuspidata (Sieb. et Zucc.) Planch. ツタ, ナツズタ

山野に普通に生育する。樹木、岩、人家の壁などへ巻ひげの吸盤によってははい登り、ときには一面に覆いつくすことがある。

Thymelaeaceae ジンチョウゲ科

Daphne kiusiana Miq. コショウノキ

68 林班猿投山北面の海拔 400~560 m 付近の谷間に点在し、個体数は極めて少ない。樹高は 1 m 内外、花は早春に咲き、6 月に果実が赤熟する。味は辛い。

Diplomorpha sikokiana (Franch. et Savat.) Honda ガンピ

日当りのよい山野に普通に生育する。穴の宮試験地内に数多く自生する。大きなものは高さ 3 m、胸高直径 3 cm を超えるものがある。樹皮は雁皮紙の原料として、当地方でも近年まで採取され農家の副収入となった。

Elaeagnaceae グミ科

Elaeagnus glabra Thunb. ツルグミ

当地方のグミ類のなかでは、個体数が最も多い。つる状に伸びる枝が短枝（逆向き）を他の木に引っかけてよじ登る。秋に開花し、果実は翌年の 5 月に赤熟する。食べられるが、渋い。

Elaeagnus multiflora Thunb. var. *crispa* (Maxim.) Servett. forma *orbiculata* (mak.) Araki
マルバナツグミ、ナツグミ

各所に点在するが、個体数は少ない。68 林班の谷川にあった 1 株は伍位塚樹木園に移植された。花は 5 月に咲き、果実は 6 月に赤熟して食べられるが、渋い。

Elaeagnus murakamiana Mak. アリマグミ

当地方では極めて稀な植物。およそ 20 年前に白坂苗畑の縁に 1 株出現し、花が咲くようになって同定された。現在は伍位塚樹木園に植栽されている。

Stachyuraceae キブシ科

Stachyurus praecox Sieb. et Zucc. キブシ

山野の谷間、谷川に普通に生育しており、乾燥するような場所にはほとんど生育をみない。材で楊子をつくる。近年、生け花材料として盛んに利用されている。

Alangiaceae ウリノキ科

Alanginum platanifolium (Sieb. et Zucc.) Harms var. *trilobum* (Miq.) Ohwi ウリノキ

演習林内では稀な植物で、35 林班の谷間（海拔 600 m 付近）と 68 林班の猿投山山腹（海拔 570 m 付近）に数株ずつ自生する。瀬戸市内では北部山地にやや普通に生育する。

Cornaceae ミズキ科

Aucuba japonica Thunb. アオキ

林内、樹下の陰地を好み、天然林の林床では普通に生育するが、特に成林した造林地ではよく繁茂し、ときに大群落を形成することがある。

Benthamidia japonica (Sieb. et Zucc.) Hara ヤマボウシ

各所に点在しているが、その大部分は中径木(高さ7~8 m, 直径15 cm内外)以下の大きさである。花は白色で大きい4個の総ほう片をつけ、6月の開花時には遠方から目立つ。果実は秋に熟して食べられる。

Cornus controversa Hemsl. ミズキ

谷間、山腹などに大径木が生育しているが、個体数は少ない。特に品野地域は赤津地域に比べて少ない。

Cornus macrophylla Wall. クマノミズキ

大径木が、谷間、山腹などに点在する。本種も個体数はそれほど多くなく、前種と同様に品野地域ではない。

Helwingia japonica (Thunb.) F. G. Dietr. ハナイカダ

谷間の湿った所に点在するが、ときに山腹などやや乾いた林内にも自生をみる。若葉は山菜として食べられる。

Araliaceae ウコギ科

Acanthopanax divaricatus (Sieb. et Zucc.) Seem. ケヤマウコギ, オニウコギ

演習林の各地の谷間に生育するが、瀬戸市内と同様個体数は少ない。オカウコギに比べて幹が太く粗大となる。

Acanthopanax japonicus Franch. et Savat. オカウコギ

68林班の谷間に2~3株の自生がある。瀬戸市内北部の山地に普通にみられ、ときに群落をつくる。若葉は山菜として食用される。

Acanthopanax sciadophylloides Franch. et Savat. コシアブラ

山地に普通に生え、高さは14~15 m, 胸高直径20 cm以上に成長しているものが多い。幹はタカノツメに似てまぎらわしいが、小葉は大きく5枚となる。樹脂液をとり塗料(ゴンゼツ)に使った。新芽はタラノキと同様に食べられる。

Aralia elata (Miq.) Seem. タラノキ

伐採跡地、新造林地に一時的に多数発生して繁茂することがある。新芽は山菜として盛んに利用され、近年は栽培ものが店頭に出回るようになった。

Aralia elata (Miq.) Seem. var. *subinermis* Ohwi メダラ

タラノキの変種で、幹と葉にはほとんど刺がなく、タラノキと混生する。利用法はタラノキと同じである。

Dendropanax trifidus (Thunb.) Mak. カクレミノ

69 林班猿投山の谷間(海拔 400 m 付近)に、樹高約 10 m, 胸高直径 12 cm のものが 1 個体生育している。同個体は 20 数年前に発見されたもので、赤津、品野地域では、これ以外に確認されていない。瀬戸市内南西部の丘陵地にも自生するが、個体数は少ない。犬山地区では若木 1 本が確認されている。

Evodiopanax innovans (Sieb. et Zucc.) Nakai タカノツメ, イモノキ

山野のいたるところで、最も普通に生育し、亜高木層、高木層を占める。ときに樹高 15 m, 胸高直径 30 cm 以上になるものもある。

Fatsia japonica (Thunb.) Decne. et Planch. ヤツデ

元からの野生はなく、鳥類などの散布によって広がったものもある。犬山地区に幼木が点在する。演習林瀬戸地区では幼木も稀である。

Hedera rhombea (Miq.) Bean キヅタ, フユヅタ

犬山地区では各所に点在し、小群落を作っている。演習林瀬戸地区では稀な種であるが、瀬戸市内の山地には普通に生育し、ときに大きな群落をつくる。

Kalopanax pictus (Thunb.) Nakai ハリギリ, センノキ

赤津地域に点在するが、個体数は極めて少ない。68 林班猿投山山頂近くの山腹に樹高約 22 m, 胸高直径 45 cm に達するものがある。犬山地区では若木 1 本が確認されている。

SYMPETALAE 合弁花亜綱

Clethraceae リョウブ科

Clethra barbinervis Sieb. et Zucc. リョウブ

山野のいたるところに普通に生え、山腹、谷間に生育するものは高さ 10~15 m, 胸高直径 25 cm に達するものがある。材は床柱、木炭に利用され、若葉は戦後の食料難時代に飯に混ぜられた。

Ericaceae ツツジ科

Enkianthus campanulatus (Miq.) Nichols. var. *sikokianus* Palib. カイナンサラサドウダン

猿投山北面 66~71 林班の海拔 400~450 m 付近から山頂までの山腹、尾根筋に生育する。日当たりのよい所に多く、ときに群落をつくる。樹高は 6 m, 胸高直径は 6 cm に達する。この他 55, 58 林班にも自生が確認されている。花冠は淡緑色から淡紅色まで変化がある。

Enkianthus cernus (Sieb. et Zucc.) Mak. forma *nipponicus* Sugimoto ベニドウダン

穴の宮量水試験地の堰堤上流にやや密生して生え、約 1000 m² の群落となっている。これは 60 数年前の試験地開設時に植栽（おそらく数株）されたものが繁殖したものである。

Lyonia ovalifolia (Wall.) Drude var. *elliptica* (Sieb. et Zucc.) Hand. -Mazz. ネジキ

山野のいたるところに普通に生育する。樹高は通常 2~3 m、ときに 7~8 m に達する。日当りのよい山野の切株から萌芽した枝は紅赤色となり、これをアカメと称して切り花に用いる。枝葉は有毒とされるので注意する。(上原, 1985)。

Menziesia cilicalyx (Miq.) Maxim. ウスギヨウラク, ツリガネツツジ

谷間, 山腹など湿ったところからやや乾いた場所の林下に広く分布する。品野地域のヒノキ林内では、林床植物が少なく地肌が現れている様などところに多い。

Pieris japonica (Thunb.) D. Don アセビ

山野のいたるところに生育する。品野地域の尾根(海拔 600 m 近く)には胸高直径 20 cm、高さは 5 m に達する古木がある。茎葉は有毒で、葉の煎汁を家畜や植物の害虫駆除に用いる。

Rhododendron japonicum (A. Gray) Valcken. Suring. レンゲツツジ

品野地域 56 林班の湿地に自生していたが、盗掘や環境の変化によって絶滅した。瀬戸市内では 2, 3 ヶ所の自生をみるが、個体数は少ない。

Rhododendron macrosepalum Maximowicz モチツツジ

山野のいたるところに普通に生え、コバノミツバツツジ, ヤマトツツジとともに当地方のツツジ類のうちでは代表種であり、個体数も多い。多くの園芸品種がつくられている。

Rhododendron nudipes Nakai subsp. *niphophilum* Yamazaki var. *lagopus* (Nakai) Yamazaki ダイセンミツバツツジ

猿投山の北面海拔 360 m あたりから山頂(629 m)まで普通に生え、これより低い所ではほとんど見られない。コバノミツバツツジと混生するため区別が厄介である。開花はコバノミツバツツジより 1 週間ほど遅れ、葉と同時かやや早く開く。最近 55 林班と岩屋町の県有林内で自生が確認された。

Rhododendron obtusum (Lindl.) Planch. var. *kaempferi* (Planch.) Wils. ヤマトツツジ

山野のいたるところに普通に生え、個体数も多い。花冠は朱赤色、紅紫色の濃淡があって変化に富む。自然交配による変異も多く、園芸品種もつくられている。

Rhododendron pentaphyllum Maxim. var. *nikoense* Komatsu アカヤシオ

69 林班猿投山北西の山腹の針広混交林(海拔 500 m)に自生するが個体数は少ない。急傾斜地の一区画に散在し、樹高は 3~7 m、胸高直径は 8 cm に達する。同地は尾張地方唯一の自生で貴重な存在である。

Rhododendron quinquefolium Bisset et S. Moore シロヤシオ, ゴヨウツツジ

68 林班猿投山北面の海拔 500~550 m 付近に点在する。葉は枝先に 5 輪生し、花は白色で、葉

より遅れて開く、尾張地方唯一の自生地で個体数も少なく、分布上貴重な種である。

Rhododendron reticulatum D. Don コバノミツバツツジ

山野に極めて普通に生育する。花は春先に通常葉より先に開くため、丘陵地の雑木林では最も華やかな彩りをみせる。

Rhododendron semibarbatum Maxim. バイカツツジ

低地から高地までやや普通に自生する。高さは1~1.5 m, 花は6月下旬頃に咲き始め、盛夏まで続くが、葉の下に隠れて気づきにくい。初冬の紅葉は美しい。

Tripetaleia paniculata Sieb. et Zucc. ホツツジ

68林班の猿投山北面の山腹の海拔400 m付近から上部に生育する。また東白坂川の入口付近(海拔290 m)にも数株自生している。花は8月下旬~9月に咲く。葉は有毒で、この花から集めた蜂蜜は有毒といわれる。

Vaccinium bracteatum Thunb. シャシャンボ

各地に点在するが、個体数は多くない。樹高は通常2~3 mで、果実はやや酸っぱいが、食べられる。庭木として植えられる。犬山地区では個体数が多い。

Vaccinium hirtum Thunb. ウスノキ

日当りのよい低地、乾いた尾根から谷間、林内のやや暗い所まで生育している個体数の多い種である。果実は赤熟し、甘味があり食べられる。切り花に利用される。

Vaccinium japonicum Miq. アクシバ

自生地は63林班~77林班(北白坂町2~東白坂町1~2)の尾根筋に多く、カーペット状に小群落をつくる。幹の高さ10 cm~20 cmで、幹の下部は腐葉土中を長く這い、通常この部分は地上部より長い。幹は斜上し、枝は横に短く伸び、若枝は緑色、一年枝はやや扁平で短毛がある。花柱は雄ずいよりやや長く、取り囲む葯の中から先端が少し突出する。若枝、葉、花柄に腺毛はない。以上の形態から変種のケアクシバ var. *ciliatum* Matsumura ex Komatsu と思われるが、なお検討を要する。

Vaccinium oldhamii Miq. ナツハゼ

日当りのよい山野に普通に生育する。果実はやや酸っぱいが、食べられる。春の新葉から秋の紅葉まで切り花として利用される。

Vaccinium smallii A. Gray var. *glabrum* Koidz. スノキ

山野に点在し、個体数は少ない。葉を噛めば強い酸味があり、果実は甘酸味があって食べられる。

Myrsinaceae ヤブコウジ科

Ardisia crenata Sims マンリョウ

穴の宮試験地内に芽生えや若苗が時折みられる程度で稀な種である。赤津、品野地域には自生しない。果実は赤熟し美しく、庭木、鉢物に盛んに利用され、園芸品種もつくられている。

Ardisia japonica (Thunb.) Bl. ヤブコウジ, ヤマタチバナ

演習林内のいたるところで、林床に、匍匐枝を伸ばして群落をつくる。果実は赤熟し、庭の下木、盆栽などに賞用され、園芸品種も多い。

Ebenaceae カキノキ科

Diospyros japonica Sieb. et Zucc. リュウキュウマメガキ

肥沃な山腹、谷間にやや普通に自生し、丘陵地にはほとんど見られない。69 林班猿投山山頂近くの山腹に樹高約 20 m, 胸高直径 30 cm に達するものがある。古木の樹皮は黒色となる。果実は長さ 1.5 cm, 径 1 cm 内外の楕円形で、晩秋熟しても渋みが残る。材はやや固く、緻密なため器具材として利用される。

Diospyros kaki Thunb. var. *sylvestris* Mak. ヤマガキ

犬山地区、穴の宮試験地でやや普通に生育するが、赤津、品野地域では少ない。果実は形、大きさに変異が多く、ごく稀に甘柿があるが、ほとんど全てが渋柿である。多くの園芸品種があり、各地で栽培される。

Styracaceae エゴノキ科

Styrax japonica Sieb. et Zucc. エゴノキ

谷や川の縁に普通に生え、また山腹や尾根にも自生する。幹は通常斜めに成長することが多く、直幹となるものは少ない。ときに樹高が 10 m を超えるものがある。材は彫刻、器具に利用される。果実はサポニンを含み有毒のため、洗濯や川での魚採りに利用された。種子はヤマガラなどの餌となる。

Symplocaceae ハイノキ科

Symplocos chinensis (Lour.) Druce var. *leucocarpa* (Nakai) Ohwi forma *pilosa* (Nakai) Ohwi
サワフタギ

谷間、山腹、尾根、崩壊地などいたるところに自生するが、個体数はそれほど多くない。樹高は 1.5~3 m である。

Symplocos coreana (Lev.) Ohwi タンナサワフタギ

赤津、品野地域の谷間、山腹に点在し、個体数は少ない。樹高 3~6 m で、樹皮は灰白色で、薄片となって落ちる。

Symplocos paniculata (Thunb.) Miq. ニシゴリ, クロミノニシゴリ

丘陵地の湿地では極く普通に自生し、ときに群落を形成する。樹高は2~4 mである。

Symplocos prunifolia Sieb. et Zucc. クロバイ

64 林班にただ一株自生する。高さ約 8 m, 根元から 4 本に分かれ, 最大胸高直径は 22 cm である。瀬戸市内では各地に点在するが, 個体数は少ない。開花時には樹冠全体が白色になるので, 遠くからでもそれと確認できる。

Oleaceae モクセイ科

Chionanthus retusus Lindl. et Paxt. ヒトツバタゴ

犬山地区斧研の 26 林班に 1 株自生する。樹高約 9 m, 胸高直径 13 cm, やや密度の高い広葉樹林内に生育するため樹冠の広がりが無い。本種は愛知県, 岐阜県, 長野県, 中国大陸, 朝鮮半島, 台湾に隔離分布する。瀬戸市内で数年前 2 株の成木の自生が確認された。近年各地に植栽され, 植木市でも販売されるようになった。

Fraxinus sieboldiana Bl. マルバアオダモ

いたるところに自生するが, いずれも小径木で材として利用できるものはない。

Ligustrum japonicum Thunb. ネズミモチ

いたるところに自生するが, 大部分は小径木である。丘陵地では個体数が少ない。

Ligustrum obtusifolium Sieb. et Zucc. イボタノキ

各地に点在するが, 個体数は多くない。樹高 1~2 m。山中で, ときどき白色の綿を巻きつけたような枝や幹をみるが, これは昆虫のイボタロウカタカイガラムシが白蠟を分泌して作ったもので, イボタ蠟と呼び, 家具のつや出し, 敷居のすべりなどに使うほか, 強壯薬, 止血薬として用いられる。

Osmanthus heterophyllus (G. Don) P. S. Green ヒイラギ

各地に自生するが, 個体数は多くない。樹高は 3~6 m, 枝葉は門口にさして厄除けとする。庭木として植えられる。

Apocynaceae キョウチクトウ科

Trachelospermum asiaticum (Sieb. et Zucc.) Nakai forma *intermedium* (Nakai) Murata テイカズラ

山野に普通に生育する。かたい蔓は, 付着根によって他物に這い上がり, よりかかった主木を被覆し, また地上をはって群落をつくる。葉は変異に富み, 地上を匍匐する細いつるの葉は通常葉の長さの 1/3~1/5 である。また葉上に白斑がでるものもある。花は白色で芳香がある。全株が有毒植物で, 殊に乳液に注意を要する。盆栽, 生け垣に利用される。

Verbenaceae クマツツラ科

Callicarpa japonica Thunb. ムラサキシキブ

林縁, 谷間, 山腹などに自生し, 樹高は3~5 mに達する。花は6~7月に咲き, 果実は秋に枝の各節毎に多数つき, 球形で美しい紫色となり, 切り花に利用される。

Callicarpa mollis Sieb. et Zucc. ヤブムラサキ

谷間, 山腹に自生するが, 個体数はムラサキシキブより少ない。樹高は1.5~3 m。6月に開花し, 果実は秋に熟す。

Clerodendrum trichotomum Thunb. クサギ

林縁, 林道, 伐採跡地, 日当りのよい山腹などによく生育する。樹高は3~4 mに達する。若葉は臭気があるが, ゆでて食用とした。慣れれば臭みも感じないという。

Solanaceae ナス科

Lycium chinense Mill. クコ

演習林内には自生はなく, 穴の宮試験地31林班に逸出したと思われる株が小群落を形成している。瀬戸市内の堤, 川原などに広がって繁茂する。薬用, 食用に活用され, 赤い果実は美しく, 盆栽, 生け花に利用される。

Buddlejaceae フジウツギ科

Buddleja japonica Hemsl. フジウツギ

69林班猿投山の谷間に数株生育していたが, 10数年前に植栽されたスギの成長によって被陰され, 現在絶滅が心配される。その他瀬戸市内北部山地に生育するが, 稀な種である。有毒植物で, 茎葉をつぶして川に流せば魚が浮き上がるので酔魚草という。

Bignoniaceae ノウゼンカズラ科

Paulownia tomentosa (Thunb.) Steud. キリ

造林地, 新植栽地などには, しばしば若い実生木が見られる。種子が風によって運ばれたものと考えられる。材は軽く, 湿気を通さず, 熱を導かないなどの長所を持ち, 日本では古くから栽培され, タンス, 下駄などに利用される。花序のついた枝(蕾時)は切り花に用いられる。

Caprifoliaceae スイカズラ科

Abelia serrata Sieb. et Zucc. コツクバネウツギ

赤津, 品野地域に自生する。次種と混生するが, 個体数ははるかに少ない。高さは1.5~2 mで, 花冠は淡黄, 淡紅, 淡橙色などの変化がある。

Abelia spathulata Sieb. et Zucc. ツクバネウツギ

山野のいたるところに生育する。通常、根元から細い幹を叢生して株立となり、高さ1.5~3 mとなる。日当りのよいところでは花の着きが多い。

Lonicera gracilipes Miq. ヤマウグイスカグラ

所々に点在するが、個体数は少ない。樹高1.5~3 m、幹はときに根元から叢生し、株立ちとなる。花は早春3月に、葉に先だてて開き始め、葉盛りの近くまで咲き続ける。果実は6月に赤熟し、食べられる。

Lonicera gracilipes Miq. var. *glandulosa* Maxim. ミヤマウグイスカグラ

基本種によく似ているが若枝、葉柄、花柄、子房に腺毛があることで区別される。1990年に51林班の谷間で1株確認された。

Lonicera japonica Thunb. スイカズラ

日当りのよい林縁、林道、土手などに自生し、林内でほとんど見かけない。茎葉は忍冬と称し、利尿剤、茶の代用に用い、花は酒につけて忍冬酒を作る。毒消しの妙薬である。

Lonicera mochidzukiana Mak. var. *nomurana* (Mak.) Nakai ヤマヒョウタンボク

北白坂町に数株だけ生育する貴重な種である。花は5月に咲き、白色で小さいため目立たない。

Sambucus racemosa L. subsp. *sieboldiana* (Miq.) Hara ニワトコ

赤津、品野地域の谷間、湿った山腹などに生育するが、個体数は少ない。樹高は2~4 mである。

Viburnum dilatatum Thunb. ガマズミ

日当りのよい丘陵地、林縁に多く自生している。開花はガマズミ類のうち最も遅い。自生地によって葉の大きさ、形、毛の多少などに変異があって、同定に迷うことがある。

Viburnum erosum Thunb. var. *punctatum* Franch. et Sav. コバノガマズミ

日当りのよい丘陵地、林縁などによく目立つ。晩秋、ガマズミ類の果実は真赤に熟し、小鳥の餌となり、種子は広く散布されるため、いたるところで自生がみられる。

Viburnum furcatum Bl. ex Maxim. オオカメノキ、ムシカリ

いたるところに生え、極く普通の種で、樹高は2~4 mである。花は葉より先あるいは同時に開く。近年、ムロに入れて開花を早めたものが切り花としてよく利用される。本種は主に山岳地帯に分布し、ときに海拔2600 mに達する種(HORIKAWA, 1972)であり、特に関東地方では低地には見られない。当地方の低地で個体数が多いことは、注目に値する。

Viburnum plicatum Thunb. var. *tomentosum* (Thunb.) Miq. ヤブデマリ

山地の谷間、湿った山腹などに生育する。個体数はそれほど多くない。樹高4~5 m、枝をほぼ水平にのばし、花序の縁につく無性花は大きな飾り花をつけ、遠くからも目立つ。

Viburnum wrightii Miq. ミヤマガマズミ

いたるところに生え、個体数はコバノガマズミより多い。樹高は2~3 m。当地方のガマズミ類で本種が最も早く開花する。ガマズミ類の幹は弾力があり、折れにくいので、石工の使う玄翁の柄に利用される。

Weigela coraensis Thunb. ハコネウツギ

赤津作業所構内に植栽された株があり、その周辺に下種更新したものがある。

Weigela decora (Nakai) Nakai ニシキウツギ

67 林班の林道脇に数株が生育していたが、樹種の判明後、伍位塚樹木園に移植した。現在は同林班の県道側壁上に1株生育している。花冠は白と紅色が交ざりあって美しい。白色花のみの個体もあった。

瀬戸市内では元来の自生はなかったが、近年各地で施行された治山、林道、護岸工事などの跡地に出現することから、この種の侵入は工事との関連が考えられる。

Weigela decora (Nakai) Nakai forma unicolor (Nakai) Hara ベニバナニシキウツギ

67 林班の県道側壁上のニシキウツギの近くに1株生育している。また、同林班の林道脇にあった株は樹木園に移植した。本品種もニシキウツギと同様の条件で出現したものと思われる。

Weigela hortensis (Sieb. et Zucc.) K. Koch タニウツギ

谷間、林道、林縁、崩壊地、伐採跡地などの開けたところに最も普通にみられる。ときに群落をつくり、樹高は2~3 m、花は5月に咲き、紅色で美しい。佐竹ほか(1989b)によると、日本海気候の山地に自生しており、当地の分布は注目に値する。

Weigela hortensis (Sieb. et Zucc.) K. Koch forma albiflora (Sieb. et Zucc.) Rehd. シロバナウツギ

56, 57 林班の海拔500~600 m付近の谷間に生育する。現在は2, 3個体が確認されているのみで、貴重な植物である。自生地ではタニウツギと混生するため、開花期以外には識別が難しい。植林によって絶滅が憂慮される。

MONOCOTYLEDONEAE 単子葉植物綱

Gramineae イネ科

Pleiblastus argenteostriatus (Regel) Nakai ゴキタケ

赤津作業所周辺、本谷堰堤などに自生する。瀬戸市内で広く各地に分布する普通のササである。稈はスタレを編むのに用いられる。

Pleiblastus chino (Franch. et Sav.) Mak. アズマネザサ, シナガワザサ

65 林班県道脇で発見され、きわめて稀な種である。

Pleiblastus kongosanensis Mak. コンゴウダケ

赤津作業所，白坂苗畑，穴の宮量水堰堤とそれらの周辺及び31林班の道路脇などで確認された。瀬戸市内のいたるところで普通にみられる。

Pleioblastus shibuyanans Mak. ex Nakai シブヤザサ

穴の宮試験地31林班の道路脇に群生する。瀬戸市内では広く分布し，各地に笹藪をつくっている。

Pleioblastus shibuyanans Mak. ex Nakai forma *pubescens* (Mak.) S. Suzuki ケネザサ

穴の宮試験地量水堰堤の近くに自生する。瀬戸市内各地で群生している。節間は無毛，稈鞘，葉鞘の面は無毛で縁に粗長毛がある。

Pleioblastus simonii (Carr.) Nakai メダケ，カワタケ

犬山地区斧研の26林班に本種の竹藪がある。高さは約10 m，径は2~3 cmである。最近枯死するものが目立つ。瀬戸地区の演習林内では全く見られない。瀬戸市内では各所に藪をつくっている。

Sasa chartacea (Mak.) Mak. var. *nana* (Mak.) S. Suzuki ニッコウザサ，ミヤマスズ

赤津作業所，学生寄宿舍，白坂苗畑などの周辺に自生する。

Sasa chartacea (Mak.) Mak. var. *nana* (Mak.) S. Suzuki forma *hattoriana* (Koidz.) S. Suzuki ミハルザサ

赤津作業所近辺，量水堰堤上部に生育する。

Pleioblastus nipponica (Mak.) Mak. et Shibata ミヤコザサ

赤津，品野地域のいたる所に群生する極く普通のササである。稈の高さは30~100 cmで，山麓，山腹では丈が高く，尾根近くになると次第に低くなる。

Sasamorpha borealis (Hack.) Nakai スズタケ

赤津，品野の全域，猿投山山頂から三国山に連なる尾根筋の林床には，ほぼ連続して生育している。

Palmae ヤシ科

Trachycarpus fortunei (Hook.) H. Wendl. シュロ，ワジュロ

住宅地に近い山地に幼木が点在する。元からの自生種ではなく，鳥類などの種子散布によって逸出したものと考えられる。本種は成木の葉先が垂れ下がるので，トウジュロと区別できる。

Trachycarpus wagnerianus Becc. トウジュロ

前種と同じく，住宅地に近い山地に幼木が点在し，瀬戸市内の肥沃地には，ときに成木が生育する。

引用文献

- 1) HORIKAWA, Y. (1972): Atlas of the Japanese Flora. 862 pp., Gakken Co., Ltd. Japan.
- 2) 環境庁自然保護局(1987): 自然環境保全基礎調査 植物目録(上)分類系順, 250 pp.
- 3) 北村四郎・村田 源(1979): 原色日本植物図鑑 木本編 II, 545 pp., 保育社.
- 4) 大井次三郎(1965): 改訂新版 日本植物誌 顕花篇 1560 pp., 至文堂.
- 5) 長田武正(1976): 原色日本帰化植物図鑑, 425 pp., 保育社.
- 6) 佐竹義輔・原 寛・巨理俊次・富成忠夫編(1982): 日本の野生植物 草本 II, 318 pp., 平凡社.
- 7) ———・—————・—————・—————編(1989): 日本の野生植物 木本 I, 321 pp., 平凡社.
- 8) ———・—————・—————・—————編(1989): 日本の野生植物 木本 II, 305 pp., 平凡社.
- 9) 上原敬二(1959): 樹木大図説 I (1300 pp.), II (1203 pp.), III (1276 pp.), 有明書房.
- 10) 我が国における保護上重要な植物種及び群落に関する研究委員会種分科会(1989): 我が国における保護上重要な植物種の現状. 320 pp., 日本自然保護協会. 世界自然保護基金日本委員会.
- 11) ZANDER, R. (1984): Handwörterbuch der Pflanzennamen, 770 pp., Eugen Ulmer Verlag.